

インド哲学における言語分析 (3)

—Nyāyasiddhāntamuktāvalī「言語論の章」和訳研究—

和田 壽 弘

語の有する直接表示機能 (śakti) が文法によって理解される場合があるが、その場合に不合理性が確認されればそのような直接表示機能を放棄しなければならないという立場にたって、新ニヤーヤ学派は動詞語尾の直接表示機能についての議論を続けている。この学派によれば動詞語尾は行為者 (kartṛ) の努力 (kṛti) を直接表示しているのであって、文法学派の言うように行為者を直接表示しているのではない。もし動詞語尾が行為者を直接表示しないとすれば、パーニニの文法規則の適正な適用によって不正な表現が出来上がってしまうというのが文法学派からの [NSM 7] で述べられた反論であった。新ニヤーヤ学派は、その規則は動詞語尾が行為者の数を表示しないときに適用されるべきであると主張して、規則についての解釈を文法学派と違えることによってその反論に答えた。次に、動詞語尾によって数が表示される行為者とは如何なるものかを巡っての議論が [NSM 8-10] で展開された。こうして新ニヤーヤ学派は動詞語尾によって数が表示される行為者の定義を確定するが、この定義にさらに新しい解釈を与えようと次の [NSM 11] で試みている。但し [NSM 7-12] で問題となっているのは行為者一般とでも言えるような無限定の行為者ではなく、能動表現 (kartariprayoga) における動詞語尾と関わる限りでの行為者であることを念頭に置く必要がある。

[NSM 11] yad vā dhātvarthātirikta viśeṣaṇatvaṃ prathamadalārthaḥ. tena caitra iva maitro gacchatīty atra caitrāder vāraṇam.

或いは、語根の意味以外のものの限定者でないということが、[動詞語尾による数の表示に適したものの定義中の] 最初の部分の意味である。従って、‘caitra iva maitro gacchati’ (チャイトラの如くマイトラが行く) というこの場合、チャイトラ等は [動詞語尾による数の表示に適したものから] 除かれる。

ここで、動詞語尾によって数が表されるものについての定義を、動詞語根の意味が言語認識において最も主要な意味要素と考える文法学派の立場に適合するように解釈し直している。こうすることによって、その定義が文法学派でも有効であることを示そうとしているのである。

この目的に為に, [NSM 8] で述べられた定義中の前半部分「目的性等と結びついていない」が [NSM 11] では「語根の意味以外のものの限定者ではないもの」と解釈される。

さらに, [NSM 11] は, 文法学派の立場においても新ニヤーヤ学派による定義が有効であることを示すという役割と定義の前半部分の必要性を説明するという役割とを果たしている。もし定義が「第一格語尾(主格語尾)を有する語によって想起されるべきもの」という後半部分のみから成り立っているとすれば, [NSM 11] 中の例文 'caitra iva maitro gacchati' の場合に [NSM 9] の解説で述べたように, 'gacchati' の '-ti' がマイトラの数だけではなくて, チャイトラの数をも表すという不都合が生じてしまうのである。

[NSM 11] による定義の新しい解釈によれば, 動詞語尾によって数が表示されるものとは, (1)語根の意味以外のものの限定者ではなく, かつ, (2)第一格語尾を有する語によって想起されるもの, ということになる。この解釈のもとで, 中の動詞語尾がチャイトラの数ではなくて, マイトラの数を表すことができるかどうか以下に考察してみる。

文法学派の立場で, この文の文法要素と意味要素の対応を示し, そして言語認識を示せば次の如くなる。

文	'caitra	iva	maitro	gacchati'	
文法要素	<u>caitra + sU</u>	<u>iva (+ sU)</u>	<u>maitra + sU</u>	gam + (ŚaP) +	tiP ⁶³⁾
	↓	↓	↓	↓	↓
意味要素	caitra	sādr̥śya	maitra	gamana	karṭṛ
	チャイトラ	類似性	マイトラ	進行	行為者

caitrasādr̥śyavadmaitrābhinnakarṭṛvṛttir gamanam.⁶⁴⁾

チャイトラへの類似性を有するマイトラと異なる行為者に存する進行 [という活動]。

文法学派の立場では, 上の表に示された如く, 'caitraḥ' からチャイトラという人物が, 'iva' から類似性が, 'maitraḥ' からマイトラという人物が, $\sqrt{\text{gam}}$ から進行という活動が ($\sqrt{\text{gam}}$ のもう一つの意味である結果, 即ち, マイトラと別の地点との結合は, 目下の議論対象ではないので言及しなかった), tiPから行為者が理解される。チャイトラへの類似性を有するものとは, 活動に関してチャイトラに似たものであり, それは即ちマイトラである。マイトラは進行という活動の行為者であるから, マイトラと行為者とは同一関係にある。この行為者に進行という活動が生じているのである。こうして, 「チャイトラへの類似性を有するマイトラと異なる行為者に存する進行 [という活動]」という言語認識が発生する。

この言語認識において, マイトラのみが進行 (gamana) の限定者となっている。つまり, マイトラは進行という動作が特定のものであることを知らせる機能を有し, それを特定の進行に

限定している、と考えられているのである。一方、同じマイトラは動詞語根の意味である進行以外の意味要素の限定者とはなっていない。また、マイトラは第一格語尾を有する 'maitraḥ' という語によって表されているから、動詞語尾によって数が表示されるものの定義中の(1)と(2)を満たす。従って、動詞 *gacchati* の語尾はマイトラの数を表すと結論づけることができる。

一方、チャイトラも同様に第一格語尾を有する 'caitraḥ' という語によって表されているので、定義中の(2)の条件を満たす。しかし、言語認識を表す表現の中では、チャイトラは類似性 (sādrśya) の限定者となっている。即ち、目下問題となっているのはどのような類似性でも良いのではなくて、チャイトラへの類似性であるというように、類似性を特定のものに限定しているのである。その場合、チャイトラは動詞語根以外の意味要素(類似性)の限定者となっており、動詞語尾によって数が表示されるものの定義中の条件(1)を満足しない。従って、'gacchati' の語尾がチャイトラの数を表すことはない。

[NSM 12] *stokaṃ pacatityādaḥ stokāder vāraṇāya ca¹⁾ dvitīyadalam.²⁾ tasya dvitīyānt-opasthāpyatvād vāraṇam iti.*

1) *K₆ omits ca;* 2) *K₆ does not punctuate here.*

また、'stokaṃ pacati' (少し調理する)等の場合に、'stoka'等を[動詞語尾によって数が表示されるものから]除く為に、[定義中の]第二部分が[述べられたので]ある。その[stoka]は第二格語尾(目的格語尾)を有する語によって想起されるものであるから、[数が表示されるものから]除外されるのである。以上[が動詞語尾の有する直接表示機能に関する、新ニヤーヤ学派と文法学派の議論]である。

[NSM 11]においてと同様に文法学派にとって、「動詞語尾によって数が表示されるものとは、(1)語根の意味以外のものの限定者ではなく、(2)第一格語尾を有する語によって想起されるものである」という定義が有効だとした場合、定義中の条件(2)の必要性がここで述べられている。もし条件(2)が述べられていなければ、定義は「動詞語尾によって数が表示されるものとは、語根の意味以外のものの限定者ではないものである」ということになる。この定義が正しいとすれば、例えば、'stokaṃ pacati' という文の場合に動詞語尾は〈少しのもの〉(stoka)の数を表すという不都合な事態に至ってしまう。文法学派においても 'pacati' の '-ti' は調理という活動の行為者の数を表すはずであって、〈少しのもの〉の数を表すのではない。何故そのような事態に立ち至るのかをまず考察し、それから条件(2)を含む定義によってこの事態をどの様にして避けることができるかを見ることにする。

文法学派によれば、‘stokaṃ pacati’ という文中の文法要素と意味要素との対応関係は次の如く示すことができる。

文	‘stokaṃ	pacati’
文法要素	stoka + am ⁶⁵⁾	pac + (ŚaP) + tiP
	↓	↓
意味要素	stoka	pāka vyāpāra kartṛ
	少しのもの	調理 活動 行為者

‘stokaṃ’ が表す〈少しのもの〉とは、調理すなわち食物（例えば米）の軟化（viklitti）という結果（phala）のことである。この結果は調理という活動によって起こる。しかもこの活動は行為者に存する。以上のことから、‘stokaṃ pacati’ という文の聞き手には次のような認識があることになろう。

kartrvṛttiḥ stokābhinnaviklittyanukūlo vyāpāraḥ.⁶⁶⁾

行為者に存し、少しのものである〈(例えば、米の) 軟化〉を生ずる活動。

この認識では ‘stoka’ が表す〈少しのもの〉は語根 pac の二つの意味の内の一つである軟化（pāka, viklitti）を限定している。つまり、‘stoka’ は調理によって食物（米）に起こる軟化の量（程度）を表すことによって軟化を限定しているのである。

もし動詞語尾によって数表示されるものの定義が条件(2)を欠いて、「語根の意味以外のものの限定者ではないもの」であるならば、‘stokaṃ’ はこの定義の適用を受けてしまう。この結果 ‘stokaṃ pacati’ という文中の動詞語尾は〈少しのもの〉(stoka) の数を表していることになってしまう。この事態を避けるために条件(2)「第一格語尾を有する語によって想起されるものである」が定義中に加えられている。この条件によって、第二格語尾を有する ‘stokaṃ’ という語によって表される〈少しのもの〉は第一格語尾を有する語によって想起されるものではない。従って、動詞語尾は〈少しのもの〉の数を表すことはないということになる⁶⁷⁾。

[NSM 12] で新ニヤーヤ学派と文法学派との、動詞語尾が有する直接表示機能に関する議論が終了する。続いてミーマーンサー学派による同じ主題についての主張が簡略に紹介され、そして反論される。

[NSM 13] evaṃ vyāpāre ’pi na śaktir gauravāt. ratho gacchatītyādau tu¹⁾ vyāpāre²⁾ āśrayatve vā lakṣaṇā. jānātītyādau tu³⁾ āśrayatve naśyatītyādau⁴⁾ pratiyogitve nirūḍhalakṣaṇā.

- 1) *BI omits tu.* 2) *BI, svavyāpāre;* 3) *K₂₁₂ omits tu.* 4) *K₆ inserts tu.*

同様に、活動に対しても〔動詞語尾の〕直接表示機能は〔働か〕ない。〔活動に対する直接表示機能があるという理論は〕煩雑だからである。しかし、‘*ratho gacchati*’（車が行く）等の場合、〔動詞語尾には〕活動または基体性に対する間接表示機能がある。一方、‘*jānāti*’（知っている）等の場合〔動詞語尾には〕基体性に対する〔慣用的間接表示機能があり〕、‘*naśyati*’（壊れる、消滅する）等の場合〔動詞語尾には〕反存在性に対する慣用的間接表示機能がある。

「動詞語尾の持つ直接表示機能は活動 (*vyāpāra*) に対して働く」というミーマーンサー学派の説が最初に否定されている。この説は特にバツタ派の中のパールタサーラティ・ミシュラ *Pārthasārathi Miśra* 系の学説とされている⁶⁸⁾。この場合の活動とは、まさしく、行為者の持つ作用であり、しかも、特定的手段 (*karaṇa*) が特定の結果を生み出すことを可能にする働きである⁶⁹⁾。例えば、斧という手段で薪を割る場合、活動とは斧の上下運動である⁷⁰⁾。このような活動の概念は新ニヤーヤ学派における媒介作用 (*vyāpāra*) に外ならない。媒介作用とは、*x* (原因) より生じ、かつその *x* より生じた *y* (結果) を生ずるものである、と定義されている⁷¹⁾。

動詞語尾が表示するものはこの媒介作用であるとするミーマーンサー学派の説を新ニヤーヤ学派は被表示性の制限者 (*śakyatāvachchedaka*) に注目することによって退けようとしているのである。被表示性の制限者は動詞語尾によって表されるもの (被表示者) の領域の指標であり、制限者が可能な限り少ない数で示されることが望ましい。制限者が少なければ、動詞語尾による被表示者 (*śakya*) は少ない数の集合で示されうることになる⁷²⁾。新ニヤーヤ学派によれば、動詞語尾に関する被表示性の制限者は努力性 (*kṛtitva*) であり、これは普遍 (*jāti*) の故に単一の存在であった⁷³⁾。

一方、媒介作用が動詞語尾の被表示者とするミーマーンサー学派 (バツタ派) の立場では、被表示性の制限者は、 $\langle x$ (原因) より生じ、かつ x より生ずる y (結果) を生ずるもの \rangle に存する $\langle x$ より生じ、かつ x より生ずる y を生ずるものであること \rangle (*tajjanyatve sati tajjan-yanakatvam*) というダルマであることになる。このダルマを *a* としておくと、ダルマ *a* が目下の被表示性 (*śakyatā*) を $\langle x$ より生じ、かつ x より生ずる y を生ずるもの \rangle に閉じ込め、制限していると考えられているのである。ダルマ *a* は *x* や *y* に代入するものに応じて別のものとなる。つまり、*x* と *y* の組み合わせの数だけダルマ *a* も存することとなる⁷⁴⁾。

この制限者に関する限り、単一の制限者を導出する新ニヤーヤ学派の説の方が二つ以上の制限者を認めることになるミーマーンサー学派の説より簡潔である。換言すれば、新ニヤーヤ学派の説の方が、動詞語尾によって表されるものの集合をより少ない数 (目下の場合は、一) に限ることができる。このように、被表示性の制限者を用いて、理論の優劣を判定する方法は

[NSM 6] に対する解説で既に詳しく言及されている [和田 1990: 82-84]。

論理的簡潔性の観点から動詞語尾は努力を表示するとすれば、(I)'ratho gacchati' (車が行く) という場合の動詞語尾が表す努力は車に帰属することになってしまう。'caitraḥ pacati' (チャイトラが調理する) の場合と同様に、文(I)中の文法要素と意味要素との対応関係、及びこの文より生ずる言語認識に言及する文は次の如く表すことができる。

文(I)	'ratho	gacchati'	
文法要素	<u>ratha + sU</u>	gam + (ŚaP) +	tiP
	↓	↓	↓
意味要素	ratha	gamana	kṛti
	車	進行	努力

(I-1) gamanānukūlakṛtimān rathaḥ.

進行を生み出す努力を有する車。

努力はアートマンの属性 (guṇa) であって、車のような無生物の属性ではない。従って、(I)'ratho gacchati' から生ずる言語認識が上記の文(I-1)によって言及されるのは誤りである。ところが、もし動詞語尾が活動 (vyāpāra) を意味するとすれば、諸文法要素と意味要素の対応は次の如くとなる。

文(I)	'ratho	gacchati'	
文法要素	<u>ratha + sU</u>	gam + (ŚaP) +	tiP
	↓	↓	↓
意味要素	ratha	gamana	vyāpāra
	車	進行	活動

意味要素である活動とは、この場合車を引くもの、例えば馬に付けられた手綱と車との結合 (saṃyoga)、つまり御者を通しての結合である⁷⁵⁾。この結合が車の進行を生み出す (anukūla) と考えられている。また、そのような結合は御者を通して車に存するから、文(I)から生ずる言語認識は次の文によって言及されることになる。

(I-2) gamanānukūlavvyāpāravān rathaḥ.

進行を生み出す媒介作用を有する車。

ところが、文(I-2)で言及される言語認識が文(I)を聞くことによって生ずることに対して、*NSM* の註釈書 *Kiraṇāvalī* によれば次の反論が予想される⁷⁶⁾。文(I-2)は、媒介作用が上に述べたような結合だとすれば、たとえ車が動かなくてもこの結合は存在しうるから、正しい文でありうることになる。このことは、車が進行しなくても文(I-2)が成立しており、この文が表す言語認識から文(I)が発話されるというこを認めることになってしまう。

この事態を避けるために、動詞語尾の意味は基体性 (*āśrayatva*) であるという理論が [*NSM* 13] で導入されている。この結果、文(I)中の文法要素と意味要素の対応関係は次のようになる。

文(I)	'ratho	gacchati'	
文法要素	ratha + sU	gam + (ŚaP) + tiP	
	↓	↓	↓
意味要素	ratha	gamana	āśrayatva
	車	進行	基体性

車が進むとき、それは進行という運動の基体であるから、〈進行の基体であること〉 (*gamanāśrayatva*) を有するものである。上記の意味要素は次のような文 (I-3) によって示される関係のもとに配列され、これが文(I)から生ずる言語認識を表す。

(I-3) *gamanāśrayatvavān rathaḥ.*⁷⁷⁾

進行の基体であることを有する車。

これまでの議論から、文(I)の動詞語尾 *tiP* の意味には媒介作用と基体性とが考えられ、 [*NSM* 13] は両者を単に「あるいは」 (*vā*) で併記するのみである。しかし、*NSM* の註釈書 *Kiraṇāvalī* は後者の意味に優位性を与えている。この二つの意味は、動詞語尾と直接表示機能 (*śakti*) によっては結び付けられ得ない。新ニヤーヤ学派では、動詞語尾は努力に対する直接表示機能を有する、と結論づけられているからである。このことは [*NSM* 6] で述べられた。 [*NSM* 13] では、動詞語尾と、媒介作用または基体性とは、間接表示機能 (*lakṣaṇā*) によって結び付けられる、としている。この表示機能は *NSM* 中で後に定義される。

さらに [*NSM* 13] では、間接表示機能を導入して動詞語尾の意味を考えざるを得ない例が二つ続く。それは 'jānāti' と 'naśyati' である。まず前者について考察するが、便宜上、'caitraḥ' という主語を補った (II) 'caitro jānāti' (チャイトラが知っている) という文から生ずる言語認識について考えることにする。この文中の文法要素と意味要素の対応は次の如くである。

文(II)	'caitra	jānāti'	
文法要素	caitra + sU	jñā + (Śnā) ⁷⁸⁾ + tiP	
	↓	↓	↓
意味要素	caitra	jñāna	kr̥ti
	チャイトラ	認識	努力

この対応の結果、これまでの例に倣って、文(II)から生ずる言語認識に言及する文は次のように表されるであろう。

(II-1) jñānānukūlakṛtimān caitraḥ.

認識を生み出す努力を有するチャイトラ。

(II-1)による限り、認識の原因である努力は認識に先行していなければならない。しかし、新ニヤーヤ学派では、認識、欲求 (icchā)、努力はこの順でのみ生起すると考えられている⁷⁹⁾。例えば、ある人が喉が乾いていたとしよう。この人が渇きをいやすために水を飲むという行動に移る場合、彼が水というものを知っているということを前提しなければならない。水そのものを知らなければ、水を飲んで渇きを癒そうとするはずはないからである。この前提から、水を飲むという行動の前には水についての認識が存在しているということが理解できる。〈水についての認識〉とはこの場合水そのものの認識であったり、渇きを癒すという水的作用についての認識であったりする。このような水の認識があつて初めて、水を望むということ、即ち水に対する欲求も可能であるから、水の認識は水に対する欲求に先行する。では、水に対する欲求と水を得ようとする行動の直前に存在する〈行動しようとする努力(決意)〉とではどちらが先行するであろうか。水に対する欲求の後に水を得ようとする努力がなされる、という点について何ら問題はないであろう。以上の考察の結果、水についての認識、水への欲求、水を得ようとする行動のための努力は、この順で生起することが理解できる。

これら三者の上記のような関係を認めるとすると、(II-1)「認識を生み出す努力を有するチャイトラ」という文は努力が認識より先行することを述べているから、誤った文ということになる⁸⁰⁾。この文が言及する言語認識は新ニヤーヤ学派の体系の中では正しい文とは考えられない。

このように、正しい文から誤った言語認識が生ずるという困難を回避するために、新ニヤーヤ学派では、'jānāti'の動詞語尾は〈基体であること〉(āśrayatva)というダルマすなわち基体性を表すとされる。この場合、文(II)中の文法要素と意味要素の対応は次のようになる。

文(II) 'caitra jānāti'

文法要素	<u>caitra + sU</u>	jñā + (Śnā) + tiP	
	↓	↓ ↓	
意味要素	caitra	jñāna	āśrayatva
	チャイトラ	認識	基体性

‘jānāti’ を構成する √jñā と動詞語尾 tiP からそれぞれ認識と〈基体であること〉即ち基体性とが理解され、その結果、‘jānāti’ は〈認識の基体であること〉を表すことになる。チャイトラは認識の基体であるから、文(II)から生ずる言語認識は次のようになるであろう。

(II-2) jñānāśrayatvavān caitraḥ.

〈認識の基体であること〉を有するチャイトラ。

さらに、[NSM 13]は、動詞語尾が努力を表すことのない特例を続けている。例えば、文(III) ‘ghaṭo naśyati’ (壺は壊れる) 中の動詞語尾は努力を表さない。動詞語尾が努力を表すとすると仮定して、文(III)中の文法要素と意味要素の対応関係を次の如く示すことができる。

文(III)	‘ghaṭo	naśyati’	
文法要素	<u>ghata + sU</u>	naś + (ŚyaN) ⁸¹⁾ + tiP	
	↓	↓ ↓	
意味要素	ghaṭa	nāśa	kṛti
	壺	破壊	努力

√nas の表示対象と tiP の表示対象との関係は ‘caitraḥ pacati’ の場合 [和田 1990: 81-82] と同様に考えれば、文(III)より生ずる言語認識は次の文によって言及される。

(III-1) nāśānukūlakṛtimān ghaṭaḥ.

破壊を生み出す努力を有する壺。

ニヤーヤ・ヴァイシェーシカ学派では壺はアートマンではないので、アートマンにのみ存する努力の基体とはなりえず、従って、努力を有することができない。文(III-1)はこの原則に矛盾するから、この文によって言及される言語認識は正しいものとは認められない。

この事態を避けるために、‘naśyati’ の動詞語尾は〈反存在であること〉(pratiyogitva) 即ち反存在性を意味すると新ニヤーヤ学派は主張する。反存在(pratiyogin)とは、存在が否定されたものである。例えば、「壺が存在しない」と認識された場合、壺が反存在である。‘naśyati’ に

関する新ニヤーヤ学派の主張のもとで文(III)中の文法要素と意味要素の対応を示すと次のごとくになる。

文(III)	'ghaṭo	naśyati'	
文法要素	<u>ghata + sU</u>	naś + (ŚyaN) + tiP	
	↓	↓	
意味要素	ghaṭa	nāśa	pratīyogitva
	壺	破壊	反存在性

破壊 (nāśa) とは、無 (abhāva) の一種である消滅無 (pradhvaṃsābhāva) のことであり⁸²⁾、必ず反存在を予想するものである⁸³⁾。破壊と反存在性との関係は、破壊の反存在に存するダルマが反存在性ということになる。破壊と反存在性とは反存在を通して間接的に結ばれており、本稿では、「破壊に対する反存在性」⁸⁴⁾という表現でこの両者の関係を表すこととしておく。破壊の反存在、つまり破壊されてしまうものは壺であるから、破壊に対する反存在性を有するものが壺であることになる。こうして、文(III)から生ずる言語認識は次の文で言及されよう。

(III-2) nāśapratīyogitvavān ghaṭaḥ.

破壊に対する反存在性を有する壺。

これまで、動詞語尾が媒介作用、基体性、反存在性を表す場合をそれぞれ見てきた。[NSM 13] によれば、媒介作用を表す場合は間接表示機能によるとされ、基体性または反存在性を表す場合は慣習的な間接表示機能 (nirūḍhalakṣaṇā) によるとされている。NSM の註釈書である *Dinakarī* (p. 271, 9) と *Kiraṇāvalī* (p. 302, 3) は、媒介作用を表す場合の間接表示機能も慣習的なものであるとしている。*Dinakarī* の註釈書 *Rāmarudrī* (p. 271, 21) によれば、慣習的な間接表示機能とは無始より存在している意図の対象である間接表示機能である⁸⁵⁾。つまり、いつより認められたか分からない間接表示機能だということである。

文法によって語の持つ直接表示機能が理解される場合の議論が以上で終わり⁸⁶⁾、次に類比 (upamāna) によってそれが理解される場合の議論に入る。このような議論のトピックの移行は [NSM 5] に述べられた直接表示機能の八つの把握手段の順序に従っている。

(未完)

註

- 63) sU と Śap, gacchati の派生過程については註(52)参照 [和田 1992a]。
- 64) 'caitrābhinnakarṭṛṣṭīḥ pākānukūlo vyāpārah' [和田 1990: 80, 註(21)] を参照して作った文である。
- 65) stoka は調理という行為の目的(対象)ではなく、√pac の持つ二つの意味の内の一つ即ち結果(調理対象の軟化)と同一である。従って、P 2.3.2 「目的を表すべきときに第二格語尾が導入される」(karmaṇi dvitīyā) によっては 'stoka' の後に第二格語尾を導入できない。しかし、vyapadeśivadbhāva という操作によって、stoka を目的と見なすことが可能となり、第二格語尾の導入を正当化できる。Vaiyākaraṇabhūṣaṇasāra (p. 21, 1) によると、目的とは、動詞語根の二つの意味の内の一つである結果 (phala) の基体 (āśraya) である (phalāśrayaḥ karma...)。従って、「目的」という概念にとって「結果の基体」が最も重要であり、第一義的なものである。一方、「結果」は「目的」として第二義的なものである。vyapadeśivadbhāva という操作は、このような第二義的なものを第一義的なものと見なすことである [Abhyankar 1977: 374]。この操作を 'stoka' に適用すれば、結果(第二義的なもの)である stoka そのものが目的(第一義的なもの)と見なされることになる。そして、第二格語尾の導入が上記の P 2.3.2 によって可能となる。(stokaṃ pacatīti. phalasyāpi vyapadeśivadbhāvena phalāśrayatvāt karmatvam. ata eva tatsamānādhikaraṇe stokaṃ ity atra dvitīyā bodhyā. atra dhātvarthavyāpārajanyaphale stokaḥ padārthasyābhedenānvayaḥ spaṣṭa eva. Sāṃkari, pp. 27, 26-28, 5.) ちなみに、'vyapadeśivadbhāva' は Mahābhāṣya (p. 12, 22) にも現れ、Abhyankar・Shukla [1975: 45] や Joshi・Roodbergen [1986: 177-183 n.739] によっても説明されている。前者は脚注においてバルトリハリ Bhartṛhari による vyapadeśivadbhāva の例を含むサンスクリット表現にも言及している。後者はそのサンスクリット表現を英訳し、解説を加えている。谷沢 [1991: 15-17] はバルトリハリの Vākyapadīya に現れる、'vyapadeśivat' を含む頌 (III-14-16) を説明するために、P 1.1.21 に対する Vārttika (1-3, 5) とそれについての Mahābhāṣya を翻訳している。Vārttika に 'vyapadeśivat', Mahābhāṣya に 'vyapadeśivadbhāva' が現れる。
- 66) 註(65)の Sāṃkari の文と、これまで言及してきた文法学派の言語認識 [和田 1990: 80] を参考に作った表現である。
- 67) 'stokaṃ pacatī' という文では第一格語尾を有する語がないので、この文から生ずる言語認識に言及する文の中で第一格語尾によって想起されるものが得られなくなる。その結果、'pacatī' の '-ti' が表す数が如何なるものか分からなくなり、正しい言語認識が発生しないことになってしまう。しかし当該文からは「[xが] 少し調理する」(xは三人称単数) という意味が理解されて言語認識が生ずるので、矛盾が帰結してしまう。このように第一格語尾を有する語を持たない文から発生する言語認識の問題点については和田 [1992 a: 註(59)] 参照。
- 68) ミーマンサー学派バッタ派では動詞語尾は能生作用 (bhāvanā) を表示すると考えられている [和田 1990: 註(25)]。能生作用には、依言のもの (śābdī bhāvanā) と依果のもの (ārthī bhāvanā) とがある。前者は、命令文(または儀軌文, vidhi) 中の動詞語尾等によって表されるもの (Veda の儀軌文の意図, または、命令者の意図) である [Mīmāṃsānyāyaprakāśa, § 4, 368; 北川 1968: 44-47]。(新ニヤーヤ学派における命令文の意味及び vidhi という語の意味に関しては丸井 [1987 a; 1988] が詳しく論じている。ミーマンサー学派の命令文(儀軌文)の種類については、Gagendra-gadkar・Karmarkar [1934: 97-104], 北川 [1969: 69-70], 前田・倉田 [1975/1976: 97 註(23)] 参照。) 後者の依果の能生作用に関しては、パールタサーラティ・ミシュラ系とソーメーシュヴァラ Someśvara 系の二つの学説があった。前者の学説については本文中に述べたが、ソーメーシュヴァ

ラ系の学説によれば依果の能生作用とは、命令文の聞き手に生じた、命令された行為を行おうとする心の動き、または、単に行為を行おうとする心の動きである [Mīmāṃsānyāyaprakāśa, § 384; 北川 1968: 44-48]。長尾 [1972 b: 49-50, 註(21)] はこのような二学説に言及しており、それについての簡単な説明が Mīmāṃsānyāyaprakāśa (§§ 384-391) に見られることを指摘している。なお、[NSM 13] の議論は長尾 [1972 a: 363-364; 1972 b: 47-50] によっても略説されている。ちなみに、バク派のクマーリラ Kumarila は首尾一貫して能生作用が動詞語尾のみによって表示されるという立場を採っていたわけではない [黒田 1979; 1980]。

- 69) anye tv āhuḥ: bhavitur bhavanānukūlo bhāvakavyāpāras tāvad bhāvanā. yasmin vyāpāre kṛte karaṇam phalotpādanāya samartham bhavati tādr̥ṣo vyāpāra iti yāvat. sa eva cā 'khyātārthah. kuṭhāreṇa chinattī 'ty ākhyātaśravaṇe hi bhavaty etādr̥ṣī matiḥ: kuṭhāreṇa tathā vyāpriyeta yasmin vyāpāre kṛte kuṭhāreṇa chedanam bhavati 'ti. ... sa ca vyāpārah kvacid udyamananipātanādih, ... Mīmāṃsānyāyaprakāśa, § 388.
- 70) 斧の例の文献上の根拠については、和田 [1990: 註(4)] 及び註(69)参照。註(4)による限りニヤヤ・ヴァイシェーシカ学派では斧の例の場合には、斧と木との結合が vyāpāra とされ、註(69)による限りミーマーンサー学派では斧の上下運動が vyāpāra とされている。このようにニヤヤ学派とミーマーンサー学派とは vyāpāra について若干の違いがある。前者の vyāpāra は原因と結果の中間に位置するいわゆる原因の一種と考えられうるものであるが、後者の vyāpāra は前者の vyāpāra の概念にさらに活動という概念を加えたものである。従ってニヤヤ学派でははかならずしも活動のみを指すとは限らず、結合という属性 (guṇa) を指す場合もある。
- 71) 媒介作用の定義については和田 [1990: 註(4)] 参照。Tarkabhāṣā (p. 33, 6-8, 15-17) には次のように記されている。「その〔無分別〕知の手段は感覚器官であり、〔薪〕割りの〔手段が〕斧であるが如くである。中間的媒介作用は感覚器官と対象との接触であり、〔薪〕割りの手段である斧にとっての〈木との結合〉の如くである。... (中間的媒介作用とは、xを生じ、xから生じたyを生ずるものである。例えば、斧によって生ずる〈斧と木との結合〉は斧によって生ずる〔薪〕割りを生み出す。この点について) (tasya jñānasyendriyam karaṇam chidāyā iva paraśuḥ. indriyārthasamnikarṣo 'vāntaravyāpārah chidākaraṇasya paraśor iva dārusamyogaḥ. ... [tajjanya janako 'vāntaravyāpārah. yathā kuṭhārajanyaḥ kuṭhāradārusamyogaḥ kuṭharajanyacchidājana-kaḥ. atra] ... 但し、当該テキストの脚注(17)によれば [] の部分を欠いた写本もある。)
- 72) この点については和田 [1990: 83] 参照。なお、「制限者」という概念が機能するための前提は、新ニヤヤ学派における関係の概念が用いられていることである。制限者は、或るダルマの存在領域を制限し、明らかにするが、どの様なダルマにでもこのように機能するわけではない。被表示性 (śakyatā) のような関係語(例えば、śakya)に接尾辞 'tā' または 'tva' を付加した語(例えば、śakyatā)によって表される関係的抽象体 (relational abstract) (和田 [1989 a: 87] [1989 b: 25]) の存在領域を制限するのである。関係的抽象体は、新ニヤヤ学派においては、関係として機能している [和田 1989 a: 86-88]。ちなみに、関係的抽象体 (例えば、被表示性) の存するところ即ちその基体は、関係項 (例えば、被表示者即ち努力) に外ならない。制限者は関係的抽象体の存在領域 (関係項) を明らかにすることにより、関係的抽象体が特定の関係項を有する特定の関係であることを知らせるものである [和田 1989 b: 31]。このような機能は「表述者」(nirūpaka) のそれとよく似ているが、制限者の方が関係項の領域を正確に制限するという点で異なる。表述者は単に関係項を指定するだけであって、関係項の「量」(quantity)を明らかにすることはできない。量を明確にする制限者の機能は既に Matilal [1968: 77-78] によって指摘されたが、量化されるものは如何なる名辞でもよいのではなく、関係項と見なされたものだけである [Wada 1988 b: 84 n. 40; Wada 1990: 97 n. 27; 和田 1989 b: 31-32, 35 註(46)]。

73) 和田 [1990: 83] 参照。

74) lakārasāmānyasya vyāpāro 'rtha iti mimāṃsakamataṃ dūṣayati -- gauravād iti. janyatvādighaṭṭasya vyāpāratvasya kṛtitvajātyapekṣayā gurutvād iti bhāvaḥ. *Dinakarī*, p. 271, 5-6. tajjanyaṭve sati tajjanyaṭanakaṭvaṃ hi vāpāratvaṃ iti, yathā kṛtinaṃ nānātvena śakyatāvaccchedakatve gauravaṃ tathā janyatvaghāṭṭavyāpāratvasyāpi śakyatāvaccchedakatve kṛtitvāpekṣayā gauravaṃ iti bhāvaḥ. *Kiraṇāvalī*, p. 301, 19-21.

75) *Rāmarudrī* によれば、動詞語尾が媒介作用を表示するとする説には欠陥があるから、動詞語尾は基体性 (āśrayatva) を表示するという説が続いて提示される、ということになる。そして、この場合の媒介作用は〈他の地点との結合を生み出す、馬等と結合した手綱との結合を有すること〉である。結合を有すること (saṃyogavattva) とは結合 (saṃyoga) であるということについては、和田 [1990: 註(39)] 参照。(ratho gacchatīty atra gamanānukūlavvyāpārasya na bodhaḥ, kin tu gamanāśrayatvasyaiveti navīnamatam āśrityā "ha. *Dinakarī*, p. 271, 8-9. gamanānukūlavvyāpālasyeti. uttaradeśasaṃyogānukūlakriyā gamadhātvarthaḥ. tadāśrayatvam eva ratho gacchatītyādau rathe pratiyate na tu tādrśakriyānukūlāśvādisaṃyuktaraṅgavādisaṃyogavattvam iti bhāvaḥ. *Rāmarudrī*, p. 271, 19-21.)

76) nanu rathaniṣṭhagamānānukūlavvyāpāraḥ takṣakādikarṭṭkavilakṣaṇasaṃyoga eva, sa ca gamanaśūnyakāle 'py astīti tadāpi ratho gacchatīti prayogāpatteḥ vāraṅyā anukūlatāsambandhena gamanaviśiṣṭavilakṣaṇasaṃyogavattvam eva tādrśaprayoganiyāmakaṃ vaktavyaṃ, ... *Kiraṇāvalī*, p. 301, 31-34.

77) 註(75)中の *Dinakarī* のサンスクリット文を参照して作った文である。

78) Śnā 接辞も ŚaP 接辞等と同様に本稿では考察対象外である [和田 1990: 註(20)].

jñā + Śnā + tiP (P.3.1.81) → jā + Śnā + tiP (P 7.3.79) → jānāti

79) 三者の発生順序は *BhP* より明らかである。まず認識から欲求が生ずることは、次の *BhP* (kārikā no. 146 ab) より理解できる。「苦のないこと及び楽に対する欲求は、それらについての認識より生ずる」(nirduḥkhatve sukhe cecchā tajjñānād eva jāyate/)。欲求から努力が生ずることは次の *BhP* (kārikā no. 150 cd, 151 ab) より理解できる。「獲得努力を生ずるものは、行おうという欲求、努力により達成できるもの [であるという観念]、望ましいものをもたらすものであることについての観念、質量因の知覚である」(cikirṣā kṛtisādhyeṣṭasādhanatvamatis tathā// upādānasya cādhyakṣaṃ pravṛttau janakaṃ bhavet/)。獲得努力 (pravṛtti) が努力 (kṛti, prayatna) の一種であることは *BhP* (kārikā no. 149 cd, 150 ab) に述べられている (pravṛttis ca nivṛttis ca tathā jīvanakāraṇam// evaṃ prayatnatraividhyaṃ tāntrikāiḥ parikīrtitam/)。 *Kiraṇāvalī* (p. 302, 6-7) は三者の関係を一つの文中で述べている。「... 実にまず人は認識し、それから欲求し、それから努力するのが規則だから...」 (... yato hi prathamam sarvo janaḥ jānāti, tatra icchati, tataś ca yatate, iti niyamāt ...)。認識、欲求、努力の三者の関係は Chemparathy [1972: 177], 宮坂 [1983: 15-16], 丸井 [1987 a: 146] にも言及されている。特に丸井 [1987 a: 146] は、三者の上記発生順序がウダヤナ Udayana の *Nyāyakuṣumāñjali* とシャシャダラ Śaśadhara の *Nyāyasiddhāntadīpa* とに記述されていることを指摘している。

80) 何かを認識しようとする努力は可能であり、「認識を生み出す努力を有するチャイトラ」という文は正しい文ではないかという疑問がわくかもしれない。しかしこう考えた場合の「努力」とは、何かについての認識を持つために必要な条件を整えることを目的にした肉体的運動を起こそうとする努力であると考えることができる。例えば、遠くにいる人が誰かを認識しようとしたとき、自己の眼の位置を変えるべく体を移動させたり、眼鏡をしていればそれを動かしたりしようとする努力のことである。認識それ自体には努力は不要であって、我々の言う「認識しようという心的努力」とは新ニヤー

ヤ学派における「認識したいという欲求」に相当するであろう。

- 81) ŚyaN 接辞の導入は P 3.1.69 によって規定されている。この接辞も ŚaP 接辞等と同様に本稿では考察対象外である [和田 1990: 註(20)]。
- 82) 無には次の四種類がある。未生無 (prāgabhāva), 消滅無 (pradhvaṃsābhāva), 恒常無 (atyantābhāva), 相互無 (anyonyābhāva) である [Tarkasamgraha, p. 62, 12-16]。未生無とは反存在が生ずる以前に存在している無である。例えば、壺が壺師(壺作り)によって特定の場所で作られた場合、壺の制作以前にその場所に存している壺の無は壺の未生無である。消滅無とは、反存在が消滅もしくは破壊された後に存在し始める無である。例えば、ある場所に置かれた壺が破壊されたときその場所に存在し始める壺の無が壺の消滅無である。恒常無とは、反存在が生ずることも破壊されることもないときに存する無である。例えば、ある場所で壺が制作もされず、破壊もされないとき、そこに存する壺の無は壺の恒常無である。相互無とは、同一性の否定によって反存在が想定される場合の無である。例えば、牛と馬との間では同一性が否定され、「牛は馬ではない」と認識される。この場合、牛に存し、同一性の否定によって想定される〈馬の無〉が、馬の相互無である。この無は別異 (bheda) とも言われる。
- 83) ニヤーヤ・ヴァイシェーシカ学派における無は必ず何か(反存在)の無であって、存在が否定されている反存在を想定しない無は認められていない。この点については、Matilal [1968: 94] と Sharma [1970: 24-25] 参照。この見解の文献上の根拠として Sharma [1970: 24 註(1)] は、ウダヤナ Udayana の *Kiraṇāvalī* (pp. 4, 21-5, 1) 中の「一方、無は [他の範疇とは異なる] 独自の性質を有するが、個別には説かれていない。[何故説かれていないかと言えば、無は] 反存在についての認識に依存して認識されるからであって、存在しないからではない」(abhāvas tu svarūpavān api pṛthan noddīṣṭaḥ, pratiyoginirūpañādhīnanirūpañatvat, na tu tucchatvāt.) とシヴァーディトヤ Śivāditya の *Saptapadārthī* (p. 24, 2) 中の「無の認識は反存在を知ることに基づく」(pratiyogijñānādhīnajñāno 'bhāvaḥ.) とを挙げている。しかし Sharma [1970: 24 註(1)] では、上記二つのサンスクリット表現が正しく理解されておらず、それらの説明として“negation is that cognition which depends upon the cognition of the counter-positive.”と書かれているが、“negation is that whose cognition depends upon the cognition of the counterpositive.”とでもすべきであろう。*Saptapadārthī* の当該箇所は Ghatte [1909: 31-32] と菱田 [1990: 63] では適切に解説されている。ちなみに、〈排除の対象〉という意味での 'pratiyogin' の使用例はダルマキールティ Dharmakīrti (7世紀) の *Pramāṇavārttika* (IV-193) まで遡ることができる。また彼の *Hetubindu* (p. 24, 20-21; p. 31, 16-17. 頁数はテキストの頁数を表す) にも〈存在が否定されているもの〉即ち反存在の意味での使用例がある。前者の意味での 'pratiyogin' については桂 [1989: 152-155] 参照。ダルマキールティに関するこれらの点について広島大学教授桂紹隆氏に御教示を賜った。排除の対象とは新ニヤーヤ学派における〈相互無 (anyonyābhāva) の反存在〉ということだから、結局この学派によれば二つの意味は反存在という一つの意味にまとめることができよう。
- 84) 「破壊の反存在性」という表現を用いた場合、反存在性は破壊に存するダルマと見なされてしまう虞がある。従って「の」を用いて、破壊と反存在性との関係を表しはしなかった。破壊という無と反存在との関係は、一般的には前者が後者の表述者 (nirūpaka) である。例えば「壺が地面にない」という場合、壺が反存在であることは地面にある〈壺の無〉によって説明可能となる。従って、壺の無は反存在を説明するための要因であり表述者なのである。この点について Matilal [1968: 59] 参照。但し、必ずしもこの立場を採らない新ニヤーヤ学派の人もいたようである [Wada 1990: 472 n. 98]。
- 85) nirūḍhalakṣaṇeti. anāditātparyaviṣayalakṣaṇety arthaḥ. *Rāmarudrī*, p. 271, 21.
- 86) 文法学派、ニヤーヤ学派、ミーマーンサー学派(バッタ派)が動詞語尾の意味を考察するための手段として、バラフレーズが [NSM 6-13] では前提とされていた。しかし、その意味を確定するため

にパラフレーズを用いれば学派的恣意を免れることができないということを Cardona [1975] は詳しく論じている。

参考文献

ここに挙げた文献は、本和訳研究の初編である和田[1990: 89-92]への追加である。但し、和田[1992a]においてすでに挙げられた文献でも本稿で用いたものについては重複を恐れず以下に挙げた。

I) サンスクリット文献

Hetubindu

of Dharmakīrti. Included in Ernst Steinkellner's *Dharmakīrti's Hetubindu*; Teil 1 Tibetischer Text und rekonstruierter Sanskrit-Text, Österreichische Akademie der Wissenschaften Philosophisch-Historische Klasse Sitzungsberichte 252 Band 1, Abhandlung: Veröffentlichungen der Kommission für Sprachen und Kulturen Süd- und Ostasiens Heft 4. Wien: Kommissionverlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 1967.

Kiraṇāvālī

of Udayana. Edited by Jitendra S. Jetly. Gaekwad's Oriental Series 154. Baroda: Oriental Institute, 1971.

Mahābhāṣya

of Patañjali. *Vaiyākaraṇamahābhāṣya* 参照。

Pramāṇavārttika

of Dharmakīrti. Edited by Yusho Miyasaka. *Acta Indologica* 2, 1971/1972.

Sāṃkari

of Saṃkara Mārulakara. Included in *Vaiyākaraṇabhūṣaṇasāra*, Anandasrama Sanskrit Granthavali 135, Poona: Anandasrama, 1957.

Saptapadārthī

of Śivāditya. Edited with the commentary *Padārthacandrikā* by Śeṣānanta and introduction and notes by V. S. Ghate. Bombay: Nirnaya Sagar Press, 1909.

Tarkabhāṣā

of Keśava Miśra. Edited with the *Tarkabhāṣāprakāśikā* of Cinnamṅhaṭṭa by D. R. Bhandarkar and Kedarnath. Bombay Sanskrit and Prakrit Series 84. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute, 1979.

Vaiyākaraṇamahābhāṣya

or *Mahābhāṣya* of Patañjali. Edited by F. Kielhorn. Revised and furnished with additional readings, references, and select critical notes by K. V. Abhyankar. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute, vol. 1, 1985; vol. 2, 1965; vol. 3, 1972.

II) 著書・論文

1) 欧文

Abhyankar, Kashnath Vasudev

1977 *A Dictionary of Sanskrit Grammar*. Gaekwad's Oriental Series 134. Baroda: Oriental Institute (first edition 1961; second revised edition 1977).

Abhyankar, Kashnath Vasudev and Jayadev Mohanlal Shukla

- 1975 *Patañjali's Vyākaraṇa-mahābhāṣya*. Āhnikas 1-3 with English Translation and Notes. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute.
- Chemparathy, George
1972 *An Indian Rational Theory*. Vienna: Indologisches Institute der Universität Wien.
- Gagendragadkar, A. B. and R. D. Karmarkar
1934 *The Arthasaṃgraha of Laugākṣi Bhāskara*. Edited with an introduction, translation into English and notes (explanatory and critical). Delhi/Varanasi/Patna/Madras: Motilal Banarsidass (reprinted with Shivkumar Sharma's introduction, 1984).
- Ghate, V. S.
1909 *Saptapadārthī*. *Saptapadārthī* 参照.
- Joshi, S. D. and J. A. F. Roodbergen
1986 *Patañjali's Vyākaraṇa-Mahābhāṣya Paspāśālmika*. Introduction, Text, Translation and Notes. Poona: University of Poona.
- Matilal, B. K.
1985 *Logic, Language, & Reality*. Delhi/Varanasi/Patna/Madras: Motilal Banarsidass.
- Sharma, Dharendra.
1970 *The Negative Dialectics of India*. East Lansing, Mich.: Michigan State University Press.
- Wada, Toshihiro
1988d "Describer (*nirūpaka*) in Navya-Nyāya", *Annals of Bhandarkar Oriental Research Institute* 69, 183-194.
1990 *Invariable Concomitance in Navya-Nyāya*. Sri Grib Dass Publication Series 101. Delhi: Sri Satguru Publications.
- 2) 和文
桂 紹隆
1989 「概念 —アポーハ論を中心に」『インド思想 3』岩波講座・東洋思想 第10巻, pp. 135-159.
- 黒田泰司
1979 1980 「Kumārila の bhāvanā 説について(1), (2)」『印度学仏教学研究』28(1) (1979) : 456-458 ; 29(1) (1980) : 436-441.
- 谷沢淳三
1991 『Bhartṛhari 著 Vākyapadīya 3-14: Vṛttisamuddeśa 訳註研究(1)』*Bibliotheca Indologica et Buddhologica* 2, 山喜房仏書林。
- 前田専学・倉田治夫
1975/1976 「インド祭事学派の諸問題 [I]」『鈴木学術財団年報』12/13: 77-100.
- 丸井 浩
1987a 「命令文の意味を問う議論 —新ニヤーヤ派の『vidhi』論争研究の序として—」『インド学仏教学論集』高崎直道博士還暦記念論集 春秋社, pp. 139-154.
1988 「命令機能の論理的解明 —インド論理学派の儀軌解釈を中心として—」『東方学』67: 123-134.
- 菱田邦男
1990 「Saptapadārthī の和訳研究(4)」『愛知教育大学研究報告』39 (人文科学) : 59-74.
- 和田壽弘
1990 「インド哲学における言語分析(1)」『名古屋大学文学部研究論集』108 哲学 36: 73-92.

1992a 「インド哲学における言語分析(2)—*Nyāyasiddhāntamuktāvalī*「言語論の章」和訳研究—」
『宮坂宥勝博士古希記念論集』 法蔵館（印刷中）。

*本稿は和田 [1992a] の続編である。動詞語尾が何を表示するかに関するバッタ派中の二学説について、東京大学助教授丸井浩氏から御教示いただいた。ダルマキールティによる 'pratiyogin' の使用例について、広島大学教授桂紹隆氏より御教示をいただいた。記して謝意を表したい。